



各務原市内寺院誌 (その一)

# 各務原市内寺院簿

(その一)



那加地区寺院簿の作成に当っては、もともと各務原市が将来市内の寺院簿の出版をするという話もあって、歴史サークルが編集に協力することから出発したものである。すでに近隣の江南市などでは、市が寺院簿を出版していて、寺院の案内などにも大きな効果を上げている。

しかし当初は意欲的であつた関係当局も、市内に航空博物館等が建築されるに及んで、大きな借入金金の負債もあり、他の市町村には立派な歴史民族資料館さえ完備しているのに、当市は資料館さえもバラックの状態である。従つて資料は収集しても、とうてい協力を得るのは至難となつた。かつて、当市には歴史の大御所「小林義徳先生」が居られて、その指導のもとに発足した夢も、このままでは挫折せざるを得ない。せめて収集した資料を残す意味もあって、ここにコピーによる寺暦簿をまとめることにした。干支その他については、正確に歴史年表から付加した。

この編集に当っては、各寺院の協力もあつたことを感謝するとともに、とくに、那加地区寺院をお尋ねするについては、サークルの坂井田勲氏の協力があつたことを感謝したい。

正確なものにする為、何度も訪れご迷惑を掛けましたが、快く応対して頂いた寺院が殆どで、その目的を達することもできた。しかし、残念なことにはんのごく一部の寺院当事者からは、全く協力を得ることができなかった。歴史のある寺院だが、こちらが悪意で訪れているかのような応対には、宗教の脱く人間性とは何ぞや、と考えさせられ勉強にもなつた。

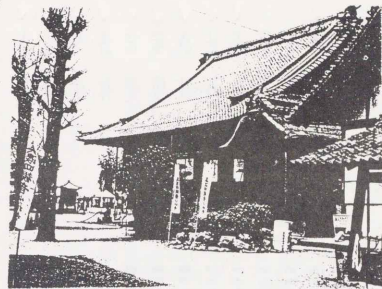
※指導・足立秀成、編集者・小野木 昌、坂井田 勲。

(各務原市歴史サークル)

目次

一 那加地区寺院「取材順」

※一	少林禅寺	臨濟宗	（新加納町）	一
※二	瑞巖寺	曹洞宗	（北洞町）	八
※三	薬師寺	法相宗	（雄飛が丘町）	一六
※四	善休寺	淨土真宗	（新加納町）	廿一
※五	法光寺	臨濟宗	（新加納町）	廿七
※六	瑞眼禅寺	臨濟宗	（洪見町）	三二
※七	済縁禅寺	臨濟宗	（前野町）	三八
※八	法藏寺	淨土真宗	（西市場町）	四六
※九	正藏寺	淨土真宗	（山後町）	五一
※十	覺王寺	淨土真宗	（本願寺派）	五四
※十一	不動寺	法相宗	（前野町）	五八
※十二	佛光寺	法相宗	（不動が丘）	六一
※十三	大信寺	淨土真宗	（本願寺派）	六四
※十四	成徳寺	日蓮正宗	（前洞新町）	六七
※十五	大願寺	淨土真宗	（本願寺派）	六九
※十六	高家寺	曹洞宗	（長塚町）	七一
		曹洞宗	（北洞町）	

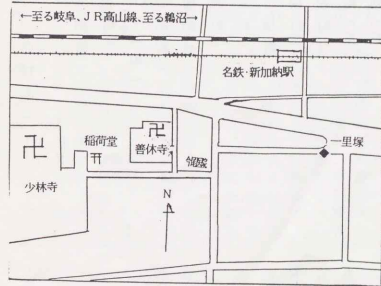


少林寺

■ (美濃新四国第二十八番)  
 T 各原那加第二十八番  
 N 各原那加第二十八番  
 E 徒步線新加納町二〇四ノ一  
 L 八分五八三(八二)〇九〇三

並本開宗住  
 び 尊基山派職  
 諸 仏

聖薄臨久  
 藏觀田陽濟司  
 善世祐英宗浩  
 薩音貞朝心尚  
 弘薩(寺尚  
 大(田道  
 師製左源  
 (年衛和  
 作江尉禪  
 年戸藤師  
 不初原)  
 詳期祐  
 真)  
 製製  
 作者者不詳  
 ( )



現場見取図

註十十十十十十十十九八七六五四三中開  
 ; 八七六五四三二一  
 ; 世世世世世世世世世世世世世世世世山

歴代和尚

太十景景景玉堯的敬碩賢肅鼎乳玉圓盤屋體大道  
 平六山洲州隆翁翁岳應芳堂州峯庭圭山天宜真  
 洋宗弘美惠慧定端恪俊哲欽周慈線端辨規全源  
 戰景浩道行等端恪俊哲欽周慈線端辨規全源  
 争州和禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪禪  
 に美尚師師師師師師師師師師師師師師師師師  
 於和  
 て行  
 戦尚  
 死の  
 さ御(昭昭昭明明明元嘉天文天法宝享宝延明  
 れ現和和治治治治永保化明曆曆保永宝宝  
 一長三三三三三三三三三三三三三三三三三三三  
 職四九八八八八八八八八八八八八八八八八八  
 い(巳未巳未巳未巳未巳未巳未巳未巳未巳未巳未  
 ) 州 明 宗 和 尚 是 昭 和 十 九 年 十 一 月 二 日、

寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂寂

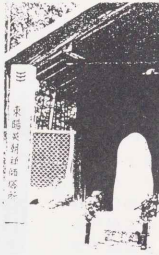
一  
 雷靈寶親  
 養神元藏公駕  
 供院院自上  
 した手流画の  
 の御槍槍自  
 伝寛后一と伝  
 説文新枝えら  
 あり十上(えら  
 年西寺)えら  
 門でれら  
 院はるる  
 (一所)鏡  
 六持在天  
 七弘不真  
 一と確向  
 (伝認)尊  
 六(え)影  
 月落れ  
 雷る  
 の一坪坪坪  
 折不内内  
 動氏氏氏  
 尊のの寄  
 體寄寄寄  
 道寄寄寄  
 進進進  
 尚と伝  
 尚がえ  
 が拾い  
 上げ

東陽英朝辭世偈  
 美林年間一統系  
 圖並びに由緒  
 高僧の肖像(画)  
 市重文  
 市重文  
 市重文  
 市重文

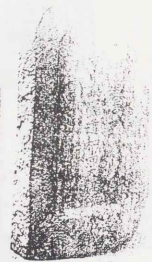
石少林寺は古溪山間(一三十一)年羽栗から島村三月十九日(字)を建立して天竜寺派が夢窓国師疎  
 微当の濃の古溪山間(一三十一)年羽栗から島村三月十九日(字)を建立して天竜寺派が夢窓国師疎  
 宗土岐氏を結ぶは薄田祐貞が新築した妙心派の住職を英朝は五十二才で丹波  
 龍興山のある陽出朝には、大徳寺和妙心寺身尾張の瑞泉寺の出を經ては当地に勸請され  
 八(美禪寺)一三二(主三)年、弓削田本郷(まけのほんご)が京都市大徳寺の莊園にな  
 四(陽九)識少(少)一四五〇(四)年、少主(た)た建薄田祐貞が明応  
 さ(彼)七(七)日、少(少)前(前)に書かれたて詩化れた名僧のそいつ永の時、元(一)五〇(四)年、少主(た)た建薄田祐貞が明応  
 衰(退)は(七)世(後)に、岐(岐)道(道)川(川)を攻めた織田信長の年火を浴びて、領主坪内とごとく、旧跡を再興後  
 承(承)応(應)山(山)一(一)世(後)に、岐(岐)道(道)川(川)を攻めた織田信長の年火を浴びて、領主坪内とごとく、旧跡を再興後  
 時(時)三(三)世(後)に、岐(岐)道(道)川(川)を攻めた織田信長の年火を浴びて、領主坪内とごとく、旧跡を再興後  
 少(少)林(林)寺(寺)は(七)世(後)に、岐(岐)道(道)川(川)を攻めた織田信長の年火を浴びて、領主坪内とごとく、旧跡を再興後  
 に(に)多(多)く(く)未(未)持(持)つ(つ)名(名)剎(剎)り(り)で(で)累(累)代(代)の(の)菩(菩)提(提)所(所)の(の)師(師)の(の)稱(稱)号(号)を(を)受(受)け(け)下(下)賜(賜)日(日)に(に)至(至)つ(つ)て(て)一(一)五(五)〇(〇)年(年)忌(忌)に(に)際(際)し(し)

節分大般若(二月三日) 玉春稲荷大祭(三月八日)  
 益施餓鬼(八月十七日) 地藏盆(八月二十四日)

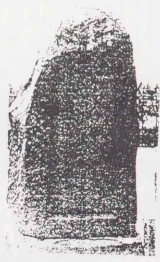
歴代和尚の墓碑



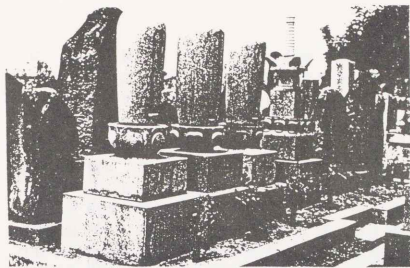
少塔林寺の開祖東陽英朝禪師の  
 永正元年(一五〇四)年八月二  
 十(一)日(日)寂(寂)す(す)る(る)承(承)  
 大(大)応(應)直(直)源(源)禪(禪)師(師)を(を)賜(賜)る(る)に(に)至(至)り(り)



中興二世體道宜全禪師。  
 延(延)寶(寶)四(四)年(年)一(一)月(月)十(十)日(日)寂(寂)す(す)る(る)持(持)ち(ち)帰(帰)り(り)に(に)報(報)恩(恩)  
 寺(寺)の(の)雷(雷)の(の)手(手)を(を)持(持)ち(ち)帰(帰)り(り)に(に)報(報)恩(恩)  
 感(感)謝(謝)さ(さ)れ(れ)た(た)る(る)傳(傳)説(説)の(の)名(名)僧(僧)



四世盤山之辨禪師。  
 享(享)保(保)八(八)年(年)一(一)月(月)十(十)日(日)寂(寂)す(す)る(る)持(持)ち(ち)帰(帰)り(り)に(に)報(報)恩(恩)  
 寺(寺)の(の)雷(雷)の(の)手(手)を(を)持(持)ち(ち)帰(帰)り(り)に(に)報(報)恩(恩)  
 感(感)謝(謝)さ(さ)れ(れ)た(た)る(る)傳(傳)説(説)の(の)名(名)僧(僧)



五世圓圭義端禪師  
四月二十三日寂。七五二）年

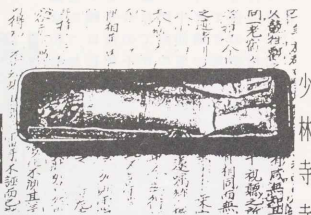
六世玉庭義線禪師。  
宝曆十四甲申（一七六四）年  
三月五日寂。

七世乳峯玄慈禪師。  
天明四甲辰（一七八四）年  
十月二十三日寂。

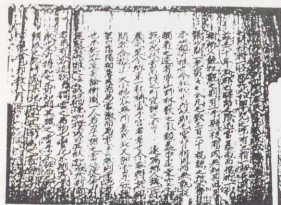
他、歴代和尚の碑。  
少林寺領内には、中興二世の  
體道禪師以下、七景淵弘道の  
然と整理された石碑が、所整  
まつい近年まで、竹林に  
まてた中、供養されて、山に  
吹山を、西方に金華山に、伊  
されては、好環境下に供養

少林寺 宝雷神の手と雷手記

一伝説では寛文十一（一六七一）年六月十八日  
雷鳴り響かき曇って大雨となり、雷鳴天地  
に天俄にかき曇って大雨となり、雷鳴天地  
まま昇天された新加納東方の雨宮の地に落雷された  
て祀り、晴天が雷鳴のころ、翌年の同月同日にな  
親子の雷神が雷鳴の和尙に相見え、報恩を感謝  
うは、今日、災害を除く、と約束して昇天したとい

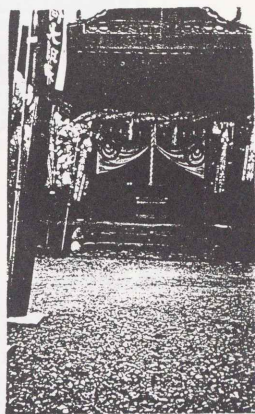


宝雷神の手と雷手記  
少林寺  
宝雷神の手と雷手記  
少林寺



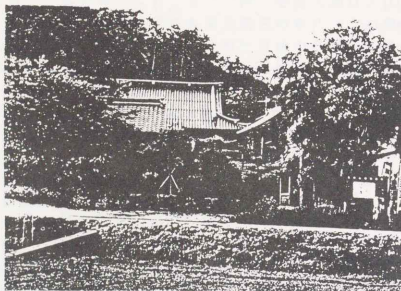
雷手記  
より、享保二十年乙卯八月の手記は、先の伝説の年  
あり、六十五年後の一七三五年に書かれたもので  
いる。雷手記の内容は、伝説とは聊か異なつて  
今尾氏の家奴が驟雨と、各務郡新加納邑の居民  
三指の一怪物の親の大きさは、嬰兒の手の如し  
七日付と一寛文十一年六月十八日は、新暦では

少林寺の鎮守稲荷堂

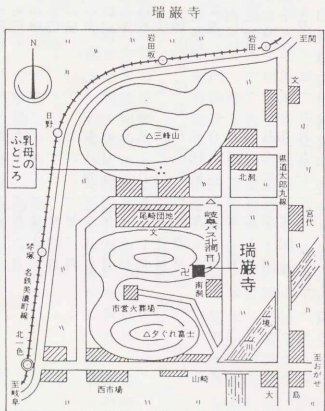


てこへーや は を 山 れ 再  
 いの行つ寺、一掛へあて三  
 る時つてに中門けて今る賊あは  
 に相夢たつたの仙前のの夜はっ和  
 出来談せよとへ稲荷が不動の尚  
 稲荷堂は、湧川と少林寺に稲荷堂を寄進せよ。和尚も知っている、すぐ寺に

北洞山瑞巖寺



■各務原市那加北洞町一・三二五  
 岐阜乗り合いバス北洞下車（瑞巖寺口）  
 T E L . 〇五八三（八三）三七一五

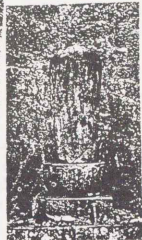


現場見取図

並本開開宗任  
 びに尊基山派職  
 諸  
 仏

（非親即雲寺一物行和の）（非務）  
 曹洞宗 松平水澤和光重（法命）光重寺殿別峰道見大居士（）  
 天桂宗 根廻舟波守光重（製作）製作者等不詳）  
 十一面観世音菩薩（製作）子育て地藏尊。弘法大師。（製作）等不詳）





開山  
天桂山  
元禄水澤  
大和尚  
八年(一六九四)  
八月二十日

寂



二道  
逸道澤  
宝永秀大  
五年和尚  
三年(一七〇八)  
三月二十七日

寂



三藍  
正徳如玉  
六年大和  
二年和尚  
二月二十三日

寂



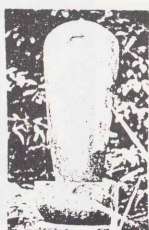
五耕  
牧仙牛大  
安永巳二  
六年和尚  
六月十七日

寂



八翻  
寛政秀激  
四年大和  
三年和尚  
三月六日

寂



十融  
文化山大  
化巨大  
十年大和  
十月一日和尚  
一八〇九

寂



十一関  
文化重牧  
化重仙大  
五年大和  
五月(一八一二)  
二十九日

寂





開山・宝

天桂永澤大和尚の  
 尊像掛け軸・  
 (延宝六年、和  
 尚六十一才の肖像)  
 咸亨は一六七八年。



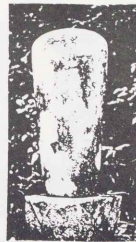
二十世  
 玉法光雲大和尚  
 昭和乙卯五十年(一九七五)  
 四月二十六日 寂



十九世  
 玉山蘇堂大和尚  
 大正癸亥十二年(一九一三)  
 十月二十日 寂



十八世  
 玉林惠雲大和尚  
 明治癸寅二十三年(一八九〇)  
 五月四日 寂

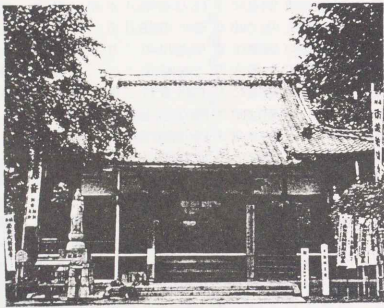


十七世  
 明天惠海大和尚  
 明治辛巳十四年(一八八一)  
 八月四日 寂



十五世  
 涵水曹源大和尚  
 天保甲辰十五年(一八四四)  
 七月二十六日 寂

住宗開大本  
僧檀  
職派山越  
諸

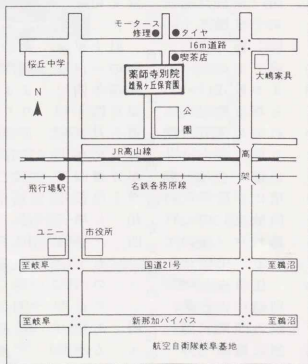


川崎山薬師寺

村上大僧正  
法相宗  
橋本凝胤  
川崎重工社長  
鑄谷正輔  
阿闍梨道弁  
貞和四年  
庚子  
（一三六五）年八月

日月光菩薩  
不動明王  
月光菩薩  
弘法大師  
保育地蔵尊

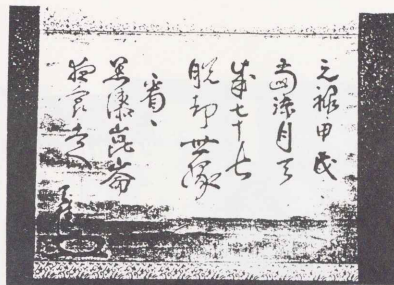
川崎山薬師寺



現場見取図

（薬師

寺各岐原別院）  
北へ五〇〇五八三（八三）五四一  
T E L 〇 〇 五 八 三 一 五 四 一



開寺山宝

天桂永澤大和尚の遺偈・  
元禄甲戌は二六九四年の  
元禄七年八月二十日、遷化の前  
に残された直筆、  
「元禄七年八月二十日、遷化の前  
に残された直筆、  
まさきわい月天の涼七にして  
よきわい月天の涼七にして  
世を脱却す  
黒漆こころの夜裏を走る」

（寺庭宝

朝庭宝より  
十一世融山御繪旨  
十世重牧和尚安永二年  
九世玉水和尚文化三年  
八世林和和尚天保四年  
七世玉水和尚安永二年  
六世林和和尚天保四年  
五世玉水和尚安永二年  
四世林和和尚天保四年  
三世玉水和尚安永二年  
二世林和和尚天保四年  
一世玉水和尚安永二年  
元禄七年八月二十日、遷化の前

歴代住職

三三二  
山世世山  
寺世世寺  
歴代住職  
大橋本庭胤大僧正。  
村七上胤胤僧正（中胤僧正は平成八年六月十一日歿。この資料を生前記述したものであり、）  
（現在）平成八年七月八日より）

不業師如來王尊像  
通本庭胤大僧正  
橋本庭胤大僧正  
高和造り十二  
富昭和造り十二  
南八月十三日  
開基朝の川重村工上日  
の字に力を盡く社長の正平三年に銘あり世の貞和は北朝の崇光天皇の年号であ  
く其材に造り力重村工上日  
十一年の記述に下して七四の御堂本堂分下には白鳳本堂の蓮弁を配し、建物中央に薬師寺を招  
て周文の念道進むと極楽浄土の阿彌陀如來に迎えられる扉の彫り、仕道は閻魔師如來  
市重文の念道進むと極楽浄土の阿彌陀如來に迎えられる扉の彫り、仕道は閻魔師如來  
四五七三九の念道進むと極楽浄土の阿彌陀如來に迎えられる扉の彫り、仕道は閻魔師如來  
な弘法大師の念道進むと極楽浄土の阿彌陀如來に迎えられる扉の彫り、仕道は閻魔師如來  
たのお弘法大師の念道進むと極楽浄土の阿彌陀如來に迎えられる扉の彫り、仕道は閻魔師如來  
寺内法大師の念道進むと極楽浄土の阿彌陀如來に迎えられる扉の彫り、仕道は閻魔師如來  
くその功績によりは市紫綬福社事業と藍綬として、村上沖胤住職が園児の育成に努力を尽  
くその功績によりは市紫綬福社事業と藍綬として、村上沖胤住職が園児の育成に努力を尽  
くその功績によりは市紫綬福社事業と藍綬として、村上沖胤住職が園児の育成に努力を尽

縁日

修正会・節分・花会式・放生会（年中行事）  
地蔵盆・春秋彼岸・施餓鬼会（彼岸中日）  
薬師縁日・毎月行事・理趣分加持（七日）  
不動護摩・護摩供・理趣分加持（二十七日）  
不動護摩・護摩供・理趣分加持（二十八日）

歴代住職の墓石碑は当寺には無い。  
開山の橋本胤胤大僧正の墓は、奈良に存在する。

◆沖胤僧正は平成八（一九九六）年六月十一日、病の爲に、寂。  
この資料収集については協力をして頂き、完成を期待されていたが残念で、念であ  
る中国に渡った僧に山田寺からの僧がいたと、自ら見られたことなど記憶に残って  
いる。都合。



薬師如来座像

昭和本二、大和山寺、奈良遷座  
大和山寺、奈良遷座  
阿闍梨十師、四月、奈良遷座  
八重道五、四月、奈良遷座  
月梨道五、四月、奈良遷座  
重道五、四月、奈良遷座  
立和四、四月、奈良遷座  
財立和四、四月、奈良遷座





第二十八代 釈得因法師  
第二十九代 釈得原法師  
第三十代 釈祐法師  
(現住職・謙祐法師)

本堂に於て説法・中・突如濃尾地方を襲つた「濃尾大地震」により、倒壊した本堂と共に焼死された。御歳五十八才であつた。尚その際、法話の聞きに集まつた信者を堂外に送り出すことに専念されて、自身は儀性となつた。寺誌は伝えられている。

寺主 住士

本光院宮藏人役所書下  
本光院宮御祈願所木札(菊花紋入り) 入り)  
本光院藏人役所御用木札(菊花紋入り) 入り)  
親鸞聖人直筆六角名号一幅・同三ツ納葉紋一箱

由緒

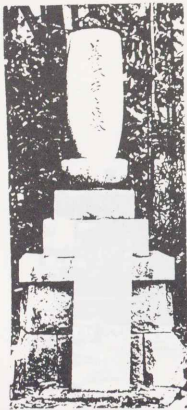
普休寺はこの地方の他の数寺と同様に、元は天台宗の流れを汲む寺院であつた。當時は天台宗傘下の光曉坊と稱していたが、寺伝によると、貞永元壬辰(一一三二)年、「親鸞聖人関東より御上洛の途次、木曾川を渡り、尾州粟部門間の庄「木瀬」(現今の鞍南町三宅木瀬)の草庵に滞在された頃、天台宗の光曉坊の住職であつた念願和尚が、当山(光曉坊)へお立ち寄りをして頂き、御化道を承け、以後真宗(転宗)となる。後世慶長時代に至り、普休寺寄りとする。と記している。宗祖親鸞聖人は下級貴族の出身で、八才の開祖となる。親と死別。慈円の弟子となつて諸宗を学び、眞の悪人法然の入門に入り浄土宗の宗祖となる。そのと、云う主旨が庶民の心を捉へた。境内については、十二世教如が慶長年間(一五九六〜一六一五)に、新加納御坊を建立し、境内に坊堂を取めたことに始まる。

慶長末年に至つて別院は岐阜の地に移ることになり、その際、光曉坊も普休寺と改名した。天台宗(一五七〇年)に織田信長の本願寺を創建し、華族の息女が住職し、旧中丘(一五七三)に織田信長の子孫が住職し、旧比呂(一五七三)に織田信長の子孫が住職し、旧乾元(一五七三)に織田信長の子孫が住職し、旧焼失した。もと一三〇二の二階門跡寺院である。寛文(一六六一)以後三年の間、定められた。三筋(一八三〇)を許され、幕府からも保護を受けてきた。由緒のある寺である。かつて織田信長が、清州から岐阜城に出た折、各務野を一覧、普休寺に休泊したと当山記録に語られている。

日録

\*正修会(一月一日) \*年中行事  
\*弘教婦人会(四月の二日間・春季)  
\*報恩講(一月五日・六日・七日)  
\*除夜の鐘(五月の二日間・春季)

歴代住職の墓誌



墓碑



墓誌







が、古い時代の法光寺三世の屋天景規和尚が、領主の坪内定長（坪内四世）と謀し、貞享三  
 年（一六八八）年八月二十四日に至りて臨濟宗に改宗（開創となる）と議し、この衰退を  
 嘆いた。時の住職の建願により、十数年の歳月費やした天保三壬申（一八三二）年に泰  
 梅そのの、晋安政の本堂の三時を興つた。劉谷（一林）の八寄進も年なりて、寺は面目を一新した。明治の世に泰  
 倒つたが、この地方を興つた。劉谷（一林）の八寄進も年なりて、寺は面目を一新した。明治の世に泰  
 年、現在の本堂を再建して、現存するも、九世住持の遺大被書に及ぼす。昭和一九三二  
 史、古の碑は、先王の墓石が供養されて、先方、明治三年に寂のため、こ

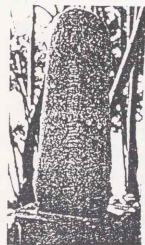
緑

日

＊地蔵盆（八月二十四日）＊盆施餓鬼（九月の第一日曜日）＊

歴代和尚の墓

供養の法光寺本堂の南に面した竹林内には、かつて寺を支えてきた和尚の墓に  
 開かれた。和尚の自然石に刻まれた墓石は、かつて寺を支えてきた和尚の墓に  
 は、この屋敷の和尚の自然石に刻まれた墓石は、かつて寺を支えてきた和尚の墓に  
 には、この屋敷の和尚の自然石に刻まれた墓石は、かつて寺を支えてきた和尚の墓に



寛開山、瑞泉屋天景規和尚大禪師。  
 寛文七年（一六八七）年。  
 永三丙戌（一七〇六）年。

寂

宝中興、雪峰和尚禪師。  
 享保四年（一七二四）年。

寂

元三世、春道祖和尚禪師。  
 宝曆元年（一七六一）年。

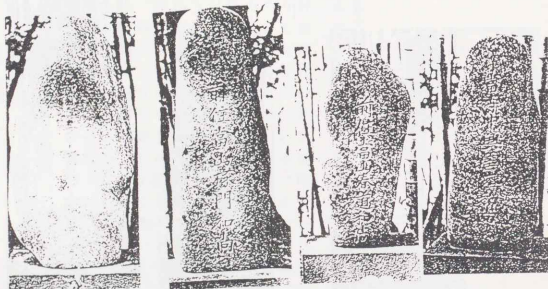
寂

宝四世、琢門祖和尚禪師。  
 天明八年（一七八八）年。

寂

寛五世、随翁未分和尚禪師。  
 文化二年（一八〇四）年。

寂



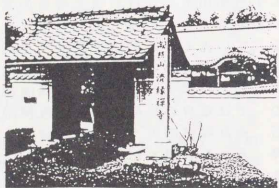






住宗開開本並  
職派山基尊に  
諸佛

吉田秀温尼（第十三代）  
臨宗和尚心寺派  
乾宝尚大（寺曆に開山第一代）  
棟一叔宙和妙心（寺曆に開山第一代）  
十動明王像・音弘法大師像（十五年製作者）  
不十明王像・音弘法大師像（十五年製作者）



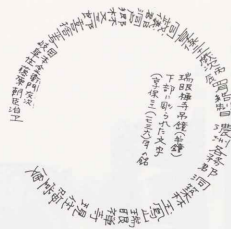
濟縁禪寺



現場見取図

高照山濟縁禪寺

■ 岐阜市那加前野町一ノ下七  
北へ徒歩五分  
E.L. 八三（八二）二七四〇



寺の新古地  
規時納村から  
の往しがわ  
模が情わ  
が何れ  
われる寺地

一（一）  
世鐘七  
二（七）  
月半三  
四（三）  
月鐘六  
八（六）  
日鐘六  
に日（六）  
示部尚  
すに鐘  
元一刻の  
文・享  
と保  
改元二  
元十  
さ十  
され文  
て一  
年十  
は十  
一  
年

寺下伊豆  
わ伊豆  
れる守  
肖像五  
軸十一  
歳の  
とき  
に画  
かれた  
と



明以前は  
二（本）  
世（堂）  
ま（前）  
れ（に）  
る（建）  
然（五）  
和（七）  
尚（六）  
尚（年）  
の（に）  
年（た）  
代（ら）  
に（石）  
当（灯）  
る（籠）  
に（銘）  
る（が）





寺曆による第四世  
観心無常和尚禪師。  
享保十八癸丑（一七三三）年正月十六日  
寂



寺曆による第五世  
再中興・応住即心和尚禪師。  
享保十八癸丑（一七三三）年二月十六日  
寂



寺曆による第六世  
正峯慧従和尚禪師。  
寛延四辛未（一七五二）年五月二十日  
寂



寺曆による第七世  
湘巖東湖和尚禪師。  
寛保二壬戌（一七四二）年九月  
日時不明  
寂



寺曆による第八世  
実応素朴和尚禪師。  
寛政二庚戌（一七九〇）年十月  
日時不明  
寂



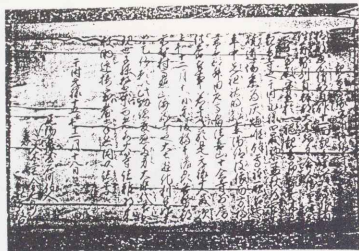
寺曆による第九世  
玉圓俊光尼和尚禪師。  
寂年月日不明



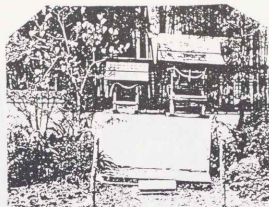
寺曆による第十世  
真応泉龍尼和尚禪師。  
寂年月日不明



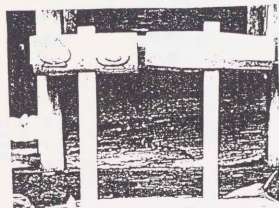
寺曆による第十一世  
天山梅芳尼和尚禪師。  
寂年月日不明



財第 一  
 天十昭 一  
 夢三枕 一  
 立世十 一  
 年立た 一  
 尼へた 一  
 九れた 一  
 五弁 一  
 財五 一  
 天秋 一  
 八の 一  
 寄附 一  
 がれ 一  
 の近 一  
 ぬ 一  
 夜 一  
 弁 一  
 早 一  
 速 一  
 寄か 一  
 水が 一  
 二和 一  
 三立 一  
 世十 一  
 年立 一  
 尼が 一  
 三た 一  
 九た 一  
 五立 一  
 財五 一  
 天秋 一  
 八の 一  
 寄附 一  
 がれ 一  
 の近 一  
 ぬ 一  
 夜 一  
 早 一  
 速 一  
 寄か 一  
 水が 一  
 二和 一  
 三立 一  
 世十 一  
 年立 一  
 尼が 一  
 三た 一  
 九た 一  
 五立 一  
 財五 一  
 天秋 一  
 八の 一  
 寄附 一  
 がれ 一  
 の近 一  
 ぬ 一  
 夜 一



寺領内社に安置  
 とされ明神(左)  
 納徳神木に  
 正徳五年の  
 元禄十二年  
 の本記と名



寺領内社に安置  
 とされ明神(左)  
 納徳神木に  
 正徳五年の  
 元禄十二年  
 の本記と名

寺

宇

五



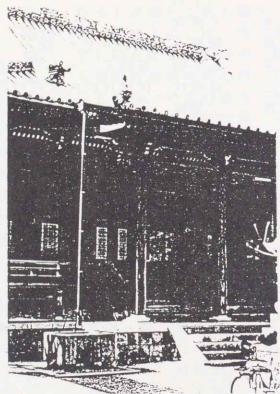
昭秀寺  
 和藏暦  
 全無一  
 一尼の  
 一和第  
 一尚十  
 一九二  
 一五世  
 一六  
 二一  
 年十  
 日

寂



住宗開本  
職山基尊  
派山基尊  
諸派山基尊  
弘派山基尊

親阿德淨平  
覺弥量土野  
聖陀法真昭  
人如師宗信  
來(寺)大  
·(立)法  
德(像)谷  
太(子)派  
子(子)是  
製(者)貞  
者(者)永  
·(者)元  
製(者)年  
作(者)一  
年(者)二  
不(者)三  
詳(者)二  
「(者)二



法藏寺



現場見取図

功德山法藏寺

■ 岐阜各務原市那加西市場岐阜町五ノ商九六前下車  
T 北へ徒歩十分  
E 徒歩十分  
L 徒歩十分  
O 五分  
五八三(八二)二三三五



濟緑寺の弁財尊天

て田  
濟緑の  
脇に安  
寺に置  
の再  
時り建  
のされ  
住職さ  
にれて  
よるも  
つもの  
のたか  
点がだ  
眼供安  
を元政  
をは更  
さ年間  
れた木  
こと山  
の麓野  
がに村  
左の  
でた  
濟と衛  
緑い門  
寺うが  
に一  
寄そ族  
付の  
さ再  
建繁  
れた  
のを  
折願  
りつ

中興 歴代 住職

初代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
二代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
三代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
四代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
五代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
六代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
七代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
八代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
九代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十一代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十二代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十三代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十四代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十五代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十六代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十七代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十八代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
十九代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信
二十代	玄乘	祐超	賢覺	貞覺	義圓	大圓	信圓	真道	昭信

太平寺十四代末、五男の昭信法師に任ぜられた。昭信法師は、名を知られたる島に於て戦死されてゐる。三兄は從つて現在争末、五男の昭信法師に任ぜられたる島に於て戦死されてゐる。三兄は

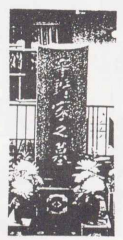
※ 真宗三世（親覺より三代目）覺如法主の真筆と云われる十字名号一幅。  
 ※ 真宗八世（親覺より八代）蓮如法主の真筆と云われる六字名号一幅。  
 ※ 南無阿彌陀仏の六文字）

天台宗の寺であつても、親覺の布教によつて次第に浄土真宗に傾いていつた。当然、

親覺の那加地区にもこの法流があつた。徳永寺は、天宗の当弟に於ては「法円寺」と号して法藏寺と号す。その重法藏寺は、明三二（一四七八）年、大正九（一九二〇）年に至り現在の本瓦葺きに改築された。寺の西方農協付近には、旗元徳山氏の陣屋跡があり旧更木郷の面影を偲ばせてく異なる寺の地名である。その子、平野謙（十四代住職の実兄）親子が残した文芸評論家として名を著した。平野謙は、昭和三十三年にその評論「芸術と実生活」で芸術選奨文部大臣賞、昭和四十五年「文芸評論上・下」で毎日芸術賞。他に「平野謙全集、さまたまな青春」で野間文芸賞。これまでの文芸会への貢献により芸術院恩賜賞、を受けてゐる。昭和三十二年四月、七十才で他界と文学史は記載。

緑 日 法要（毎月二十八日）  
 ※ 宗祖親覺上人命日

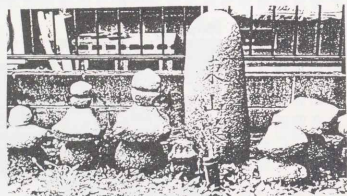
歴代住職の墓碑



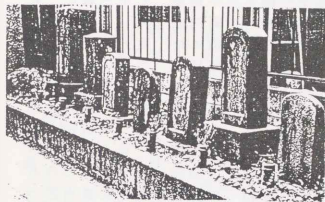
歴代住職の墓碑



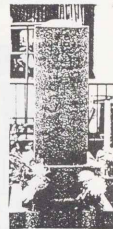
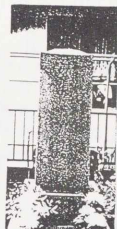
その法蔵寺山門より西に二百メ  
 ーの片隅に建てられた西市場農協  
 支所離れ  
 更木陣屋跡だと伝えられている  
 史跡支柱が



「無名戦死者の墓」  
 明治時代になって、各務用水の開通に  
 あたり、古くから供養されてきた墓  
 田の中に寺で供養されてきた墓を  
 集めて、伝説によつて、無名戦死者の  
 治めていた和佐木氏へ、無名戦死者の  
 とはいわれ、この墓源を



「寺正の旗本墓」  
 徳山氏の家原の旗本墓に  
 と山家康を治めた徳山氏陣屋  
 徳木八郎が、徳山義興の墓に  
 法蔵寺の近山供養の墓に  
 維新のお寺の兄弟も、裁縫の  
 妻新お徳子の墓に、徳山義興の  
 女後、寺内、弟も、裁縫の



昭和第十道九法代  
 一師  
 一九四四年

寂

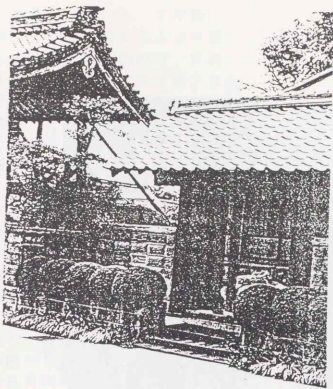
大正第十信五法代  
 一師  
 一九二六年

寂





白井山覺王寺



■ 各務原市那加前野町三ノ八車  
 北へ徒歩五分  
 TEL 0583(82)3336



現場見取図

住職 宗山派  
 開基 山派  
 開山 宗山派  
 並びに諸仏

浄土真宗本願寺派  
 平嶋賢了法師  
 阿彌陀如来。運如上人。聖德太子。七高僧。(製作者等不詳)  
 釈迦牟尼。運如上人。聖德太子。七高僧。(製作者等不詳)  
 釈迦牟尼。運如上人。聖德太子。七高僧。(製作者等不詳)

歴代住職 (法名)

一開	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二
山	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世	世
釈道黙法師	釈俊貞法師	釈仰輪法師	釈楚應法師	釈義教法師	釈義隨法師	釈義誠法師	釈信誠法師	釈義誠法師	釈義誠法師	釈義誠法師	釈義誠法師
天和三年	享保十九年	天明九年	文政四年	安政四年	文政四年	明治四年	昭和七年	昭和七年	昭和七年	昭和七年	昭和七年
四月	四月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月	正月
寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂	寂寂

寺守

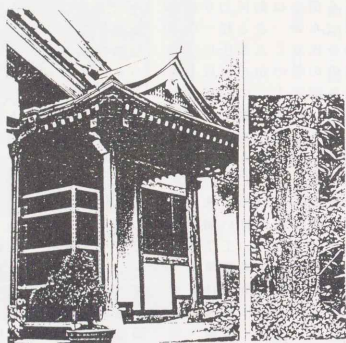
★ ★ ★ 俱舍論三界五趣之図。(寺伝では創立当時)  
 ★ ★ ★ 聖徳親鸞聖人六字名号。(天文四〇未「一七三九」年春の銘)  
 ★ ★ ★ 釈寂如絵画像像。(享保十三庚申「一七二八」年、願主・俊貞の銘)

一 覺王寺は承応三(一六五四)年當時、天台宗の僧であつた道徹が、この美濃西地には多くの寺院が開創と云われている。天台宗の僧であつた道徹が、この美濃西地にその改宗第一世は、天台宗第五世に当る釈俊黙法師である。

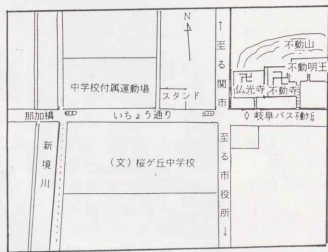
住宗開闢本  
職派山基尊  
に弘

島田昌胤（現住職）  
法相宗  
島田壯英（昭和四年）  
清水力松（昭和四年）  
不動明王（石像）  
製作者不詳

製作者不詳  
製作年等不詳



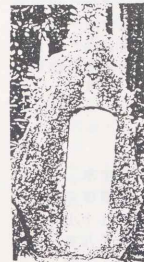
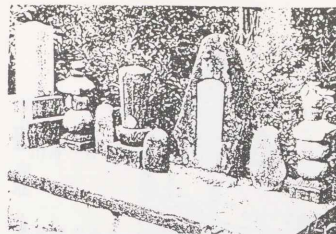
不動寺



現場見取図

扇不動尊

■ 各務原市那加不動ヶ丘二ノ二九  
T北 岐阜市那加不動ヶ丘二ノ二九  
E 北 岐阜市那加不動ヶ丘二ノ二九  
L 北 岐阜市那加不動ヶ丘二ノ二九  
S 北 岐阜市那加不動ヶ丘二ノ二九  
0 五八三（八二）二七八七



この専ら法師は、改宗一世以後には  
みあたすは、改宗一世以後には  
の文たるは、改宗一世以後には  
住の元は、改宗一世以後には  
職の碑は、改宗一世以後には  
だろは、改宗一世以後には  
う改宗一世以後には

真覺聖人の説く「自ずから真の悪人と自覚す  
ることにより救われる」と云う主旨により、  
石碑は、浄土宗の寺院住職の墓  
一般に、浄土宗の寺院住職の墓  
一に、浄土宗の寺院住職の墓  
改宗一世は、改宗一世以後には

歴代住職の墓碑

林  
★★★ 報恩講（一月四日）（年中行事）  
★★★ 盆会・秋季永代経（八月）（三月第四日曜日、年により前後す）  
★★★ お取り越し・報恩講（十一月五日、十二月）（年により前後す）

覚王寺は明治十四年頃に移築したもので、この地に伝えられて堂宇を移して歴史の一  
を現職の父兄は、先にも記した通り、昭和二十年（一九四五）五月、太平洋戦争の折  
に、現職の父兄は、先にも記した通り、昭和二十年（一九四五）五月、太平洋戦争の折  
に、現職の父兄は、先にも記した通り、昭和二十年（一九四五）五月、太平洋戦争の折  
に、現職の父兄は、先にも記した通り、昭和二十年（一九四五）五月、太平洋戦争の折







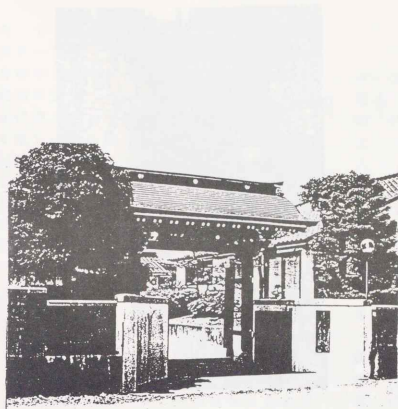




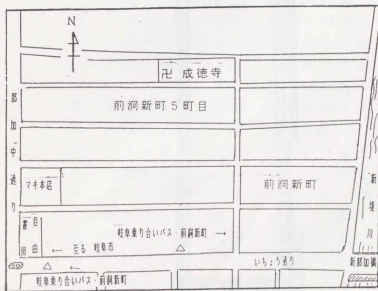
諸行山成徳寺

(じょうとく)

■ 各務原市那加前洞新町五ノ一九ノ一  
 北岐乗合バス前洞新町下車  
 T E L 0583-89200



成徳寺



現場見取図

宗住職 久保川信海  
 開山派 日蓮正宗(しょうしゅう)  
 本山 日達上人(総本山第六十六世)  
 並びに諸佛 日達上人書写十界互具(じんご)曼陀羅

久保川信海  
 日蓮正宗(しょうしゅう)  
 日達上人(総本山第六十六世)  
 日達上人書写十界互具(じんご)曼陀羅

歴代和尚

初代 久保川信海住職(現住)

寺守 安玉

\*宗祖大聖人御影(だいしようじんみえい)。(日蓮聖人)

由緒 (沿革)

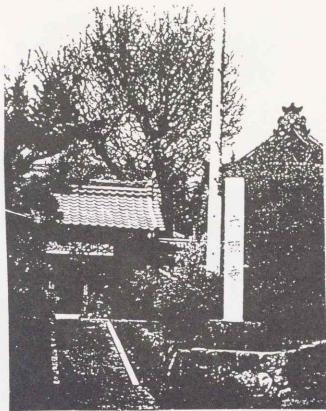
当山は昭和五十三(一九七八)年十二月六日に、日蓮大聖人の七百遠(おと)忌記年の自業として報恩感謝のため、静岡県富士大石(しづ)寺より分山に至ったもので、本山の歴史を継ぐが、当地での歴史として新しい。

縁

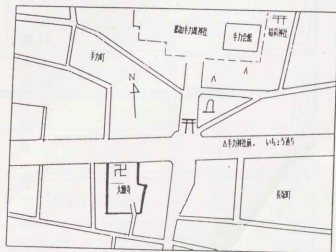
★★ 毎月十三日(年中行事)  
 毎年十月に(宗祖大聖人報恩講・おんえ)式。

実静山大願寺

■各務原市那加長塚町一の一二七  
TEL・0583(八二二)一六六八



大願寺



現場見取図

住職 宗派 開山 開基 本尊  
並に諸佛

河野博雲 ……(平成八年八月・死去・後任住職、不詳)

浄土真宗(本願寺派)  
浄誓和尚(慶長年間)

阿弥陀如来

歴代住職

※大願寺についても他の那加地区内の寺院と同様に、各務原市の記録として列記すべきであったが、調査不能のため不記載とする。  
以後、状況が変われば資料として保存も然るべきと考えるが、現在は未定。  
せつかく歴史のある寺院ではあるが、歴代住職等についても前記状況により空白とする。  
(編集者・小野木)

……博雲住職は聞き伝えによると、平成八年八月末、他界という……

由緒

公の資料によると、当寺は親鸞の弟子正慶が、尾張の国羽栗郡久野庄の飛保郷に建てた寺であったが、慶長年間になって、本願寺本山が東西に分裂の際、時の領主が、東本願寺の末寺にしようと思論んだものを嫌って、寺の第十二代住職であった浄誓和尚が、尾張を退去して現在の地に移り、この地に創立したものと伝えられている。  
郡上郡初音村の安楽寺や石原村の明願寺は、大願寺の末寺だと云ういい伝えがあるが、詳細は不明である。

歴代住職碑

……前記理由により調査不能、不記載

以上









各務原市図書館  
11484687



5  
0